

県立盲学校の事例

(1) 普通高等学校からの転入者事例

高等学校2年生2学期まで、県立高等学校で学んでいた生徒が、視力の著しい低下により、盲学校へ転入学した。

本人は、通常の高校での読みのスピード、他の生徒の動きの把握に、学習上の限界と危険を感じ転入学した。

現在、障害に応じた安全な学習環境で、見えないことを気にせず学習できることに本人・保護者ともに感謝し、将来の職業選択に向け国家試験受験資格獲得のため専攻科へ進むべく、学習に励んでいる。

(2) 中学校普通学級からの転入者事例

中学校1年生2学期まで、通常学級で学んでいたが、通学途上の危険や見えにくい中でがんばることによる体調不良等が生じた。本人、保護者が本人の障がいを配慮した学習環境と身辺自立を願って盲学校に転入学した。本人・保護者は、転入直後は寄宿舎生活等環境の変化に大きな戸惑いがあった。

しかし、現在は、通常の中学校では気づかれなかった、見えにくいことによる学習の欠落部分について補習しながら高等部卒業後の進路を考えて、高等部での自力帰省を目標に独歩の力を高めることに努力している。

(3) 支援を受けていた生徒が高等部へ入学した事例

中学校において、通常学級で認定就学者として支援教員による支援を受けながら学習していた生徒が、将来の自立を考え盲学校高等部普通科へ進学した。

本人は、常に支援を受けて学習するのではなく、支援の力を借りず学習したいと話しており、現在寄宿舎を利用し、安心して学校生活を送っている。

保護者は、こうした生徒の成長をみることができ、安堵している。

(4) 全盲でありながら通常の学校で学んでいる児童生徒の課題

小学校低学年の児童においては集団での学習と友だち関係を楽しみ元気に学習している。小学校高学年になるにつれ、他の児童の親切な良い人間関係の中で、自身でできることもいつの間にか支援を受けて行うことが多くなっている。

そのため、自分の意思を表現することが少なくなり、いつの間にか自立することに消極的に変化している。

また、周りの支援で他と同じように形が整うため、自分自身の力が見えにくくなっている。

中学校では、教科の学習全ての準備が整わず、限られた学習内容となり、一様な学習を進めることに体力的にも限界を感じる生徒が出てきている。

さらに、一般的な進度に応じた学習を進めるにもかなりの体力と気力を使うため、学年があがるにつれ欠席や保健室利用が増えている。